

季刊美術誌

パリの通信

No. 4



地中海志向

特集 ルドヴィック・クリメック

日本美術家外遊史③

二人の美校教師・批評家の道 針生一郎

対談 アウシュビッツをめぐって 丸木位里・俊

定価七五〇円

いい友達、トロージャン



MEN'S TOTAL FASHION
Trojan

心から語り合える友達をあなたは何人もっているだろうか。いつも素顔の自分が表わせ、しかもあたたかい支えとなってくれる相手…。トロージャンもまた、ひとりの友達。それはいつも身に寄り添い、着る人の心に表情に、おとならしいゆとりと落着をあたえてくれる。

気持ち、はずんでる?



東京・大阪・京都・神戸
大丸
町田・和歌山・八王子

博多・下関・高知・鳥取・新居浜・米子・今治・岡政

かれるが、通りの明かるさに慣れた目にはただ黒々とした四角い空間が見えるだけだ。目の前のおぼろ気な人影が揺れるのをずっと上に辿って行くと、涙で一杯になったあの親しい二つの目に出会うだろう。その人はたゆたうような不思議な声で迎える。《ああ、なんて美しい花々でしょう。ありがとう、本当にありがとう》会話を交わす間にも勿忘草のような色の目は決して花々を離れることがない。至福がこの世に姿を現わす時には、クリメックさんの目の形をとるのだろう。ところが、あくる日、驚嘆すべき情景に出くわすだろう。それは花々の亡霊である。大地からも生命の水からも切り離されたマリア達はただ呆然と衰えて行く。それを前に静かな人がある。それはクリメックだ。長い指先に支えられた絵筆からは、炎のような構成をもった新しい花々が燃え上って行く。こんな時、クリメックさんはまるで哲人のように見える。理性の鉄格子が降りた彼の内側にはもう誰も入れない。この不幸、この命から、素朴な質問が人に真直ぐに向けられた時、人の心の中から何かが答えて立ち上がるのをみるだろう。

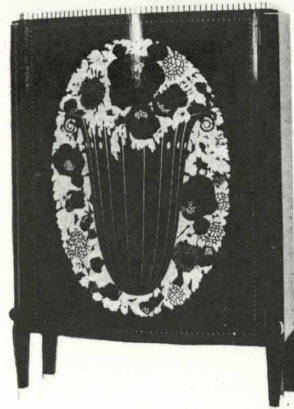
《二体、世の中の人は人生の友達をもう必要としなくなったのでしょうか》それは世のいわゆる芸術愛好家が絵画を投機の対象とみなし、無名の作家の作品が年々売れなくなり、あるいは思惑買ひされて行く現実が話題になる雨の午後である。雨が晴れて陽気が良いと、クリメックさんだっ、這出する。ジュラ山脈の方まで足を伸ばすと《デザルプ》マリチムの風景《アーモンドの木のある風景》のような雄大な風景画が生まれる。そんな時には、やはり絵を描いている老婦人や、そ

の他の一人、人と、馬力の「ねずみ」に乗って淡々と出かけて行く。古い教会で行われた南仏の画家達の総合展に招待作家として出かける時も、その婦人は、緒である。シャンペングラスの透き徹ったのを手に持って、美術館の館長さんなんかと話していると、もう個展の時に新聞記者が撮った写真の中の人物になってしまふ。夜、海の町で南仏名物の魚のスープレを満腹するまでごちそうになると、哀愁を帯びた歌声が流れて来る。広場では、ジャン・コクトーに見出されたというマニタス・デ・プラータが、馬車にしつらえた仮舞台でライトを浴びているが、そのエクスタシーは人々に対して強度の感染力を持つらしい。重々しい色彩のかたまりがふと近づいたとみると、ジブシーの老婆である。《星よ、月よ、あなたの運命をみてさしあげましょう》裸足のカルメン達もあちこちと人波の中に散って、かき入れ時に大衆である。

うねうねとした小路を登って、半ば崩れかけたお城が美術館となつてゐる。その館長さんに会いに行く日は背高のつぼのダニエル青年とサンダルをはこう。何百年もの間に積み重なった人類の美のあかしを、亀裂の入った高窓から下がつている蔓草の間に倦かず眺める時、クリメックさんの神秘的な贈物が私達の手のひらに届く。《百年経った時、僕の作品の前で君達の足が少しでも長く留ることを願って、僕は描き続けるんだよ。僕達は小鳥が歌わずにはいられないように、作品を描かずにはいられないんだから。》

城塞の澄んだ鐘の音が町々をよぎり、はるかな海へと流れて行く……

(ルボ・八重嶋佳枝)



一九二五年展

アート・デコラティブ美術館

パリはいくく数年来レトロ（Retro）、レザネ（Les annees folles）を中心に、洋服のモードに、室内装飾に、レストランに、フレイックにと数々の分野で古き良き時代の想い出が大流行、おりから一九二五年の「現代装飾、工業美術国際展」の五十周年記念の一九二五年展が一年遅れて新文化大臣フランソワーズ・ジロを迎えて当時大流行だったレキシントン・ジャースと共にその幕を開いた。

一九〇〇年のパリ万博で幕を切った近代化の波は、この展覧会でその一つの形を残したことになる。この二十世紀の形は、なんといつても一九世紀と決定的な違いが装飾の世界に見られる。これまでの室内装飾と違い、前時代の中とは全く新しいものを作ろうとしてゐる点であらう。数々の出品物は、一九二五年に実際に出品されたものがほとんどで、その他、見取図、オリジナルデザインプランなどが出品されている。中には、今日でもその名の高いジャンヌ・ランバンやル・コルビジエの作品も目につく。

このアート・デコラティブ美術館はルーブル宮の中にあり（現在、ルーブル宮の中にはルーブル美術館とラランス大蔵省とこのアート・デコラティブの三つがある。ルーブル美術館とジユ・ド・ボーム（印象派美術館）にはさまれて、とかく観光客に忘れられがちであるが、室内装飾に興味のある方々は是非とも忘れられない美術館である。また、アート・デコの図書館には、装飾に関するありとあらゆる資料がそろえられているので、いつでも参照できる。来春からはフランス手工芸に対するインフォメーション・センターもこのアート・デコの中に設けられそうだ。

ルーブル宮





ルドヴィック・クリメック「エクスタシー」1975年 50×60cm

スイッチを切ると、後には厚い南仏の夜の帳が降りる。ヴァカンス帰りのひっきりなしの車の群の遠い騒音は、秋への前奏曲だ。

あしたになるとクリメックさんの画室に朝の光が訪れる。むせかえるような油絵具の匂いがたち昇る中に、ずらりと並んだカンヴァスの上を波の絵に向かうとその光は走る、走る。

彼の絵に向かうと鳩の鈍い羽音が舞い上り、羊歯が薫り、エロスの娘達のひそやかな囁きが人を神秘的な悲嘆と快楽の四次元の花園に一瞬のうちに攫って行くだろう。それは深い穴ぐらのように不幸だ。花々はみるみる死に絶え、生まれ、咲き誇ってはまた姿を消し、より深い沈黙の中に落ち込んで行く。

その豊饒な恐しい大地の胎動の中に、人は孤り残される。実はこの悦楽は枯れ切った花束の死骸から甦って来るものなのだ。たとえばさびれた小さな街角の花屋から、滝が流れるように色彩が流れ滴る生花を腕一杯かかえて、クリメック家のチャイムを指で探りあて、つかみつかし鳴らすとする。ドアは内側からパツと開



ルドヴィック・クリメック「浄」1975年 50×65cm

て、彼はエレベーターのボタンを押し、自宅に、画室へと消える。夜食が済んだらもう何十年もの間友達のおんポロギターを取り出して、笑いを含んだ良い声を響かせる。かき鳴らす調べはおおむねバリエーションの骨董品だ。不思議なことにクリメックさんの頭の中からは、彼の青春時代を吸いあげたポーランドの思い出は、きれいさっぱり消えている。ポーランド語はいまだ奥さ、プロニア夫人と、カンヴァスの張り方なんかで、私達のするような短い夫婦喧嘩をする時ぐらいにしか役に立たない。(プロニア夫人はソルボンヌの美術コースを卒業し、おまけに法学士のディプロム所有者である。)

一体ポーランドの原野は彼の記憶の中でいつ死んでしまったのだろうか。《私達のポーランドはもうこの世にありません。山も川もみんな違った相貌を帯びてしまいました。》いつか一度だけそんな言葉が漏れたことがあった。遅くなって、さだまり走ったりするクラシカルなテレビの画面に「おやすみなさい」と言っ



ルドヴィック・クリメックについて

ジョルジュ・マントン
(ソルボンヌ・フランス文化講座主任教授)

Georges Mathon
(traduction par Y. Jacqin)

現代造形美術の探求は重要さの上で非常に不均衡な二本の
軸の周辺で行われているように思われる。その一本は素材
あるいは非絵画的素材とでも言うべきであろうか。例をあげ
れば砂とか金属の類であるが、それらは未だ美術の実験的段
階にとどまっている。もう一本の軸とは一つの新しい空間
の定義である。これは必然的に独自の色調の開発という帰結
をもつ。

私がここに取り上げるのは最も実り豊かな第二道程に属す
る偉大な芸術家であり、その名をルドヴィック・クリメック
と言う。

この種の絵画の発展を見守る者は、おそらく絵画がレアリ
スムからアンフォルメル筆法へと移行して行くのに気付く
であろう。事実クリメックにとって抽象化はそれほど根本的
な問題ではない。

クリメックは赤やベージュやブルーの斑を使って我々の眼
前に調和に満ち満ちたスペクトルを展開してみせるが、そ
れはカンディンスキーの神秘の世界と今日のフランス絵画が
構成している夢想を想起させる。それらの斑点を見ていると、

次から次へと、あるいは瞬間のうちに女達のしなやかな姿態
やマントンの風景、あるいは宇宙空間の飛行等が甦って来る。
クリメックの世界は驚愕をもたらして止まない。という
のは、我々の最も深い自我と外界との絶えざる交流を惹き起
こすもの、それこそまさに真の創造者のみがある。飛翔
であるからである。

(八重嶋佳枝・訳)

ルドヴィック・クリメック略歴

フランス人。ポーランド (Skożów-Sięńsko) 出身。一九二一年生れ。幼
年期より絵画制作に打ち込む。第一回展覧会11才。Gracovie美術学校卒
業。
一九三九年春 Paris 上京、フランス政府奨学金を得る。現在 Jumiès-Pins
在住。

受賞

一九四九年 Hallmark 最高賞
一九五〇年 Oscar 賞 (Monte-Carlo)
一九五〇年 Sainte-Luce 賞 (U.M.A.M.)
一九五一年 Muratore 賞 (U.M.A.M.)
一九五二年 Le France 賞 (U.M.A.M.)
一九五三年 Biennale 銀賞 (Menton)
マントン・ビエンナーレ招待作家
カンヌ・ビエンナーレ招待作家

地中海志向の源泉を求めて

作家訪問 I

ルドヴィック・クリメック

Yacine Jacqin

クリメックさんは紺碧海岸 (Côte d'Azur) と呼ばれる世界
中の青を集めたような地中海の岸辺のどこかに住んでいる。
家族的な奥さんとタニエルという名の二十五・六歳になる優
しいもの静かな息子さんとの三人暮らしだ。部屋は四つで、ク
リメック一家と一緒にクラコヴィの町からはるばる来たのか
なあ……アール・ヌボール風の金色の曲線にピンクッション
のような真紅のじロッドがのつかった四つの椅子と、不意の
来客時にはしばしばベッドの代用品になるレザー張りの平凡
な黒い長椅子と、おそらく懐かしい手紙かなんかが一杯に詰っ
ていたりする、丈の低い洋菓子と……道具立てはそんなところ
である。《神秘の青の海》は、この客間に続くベランダか
ら背伸びして眺めると、ゴッホの絵でよくお目にかかる振れ
た糸杉の木や、暖かな朱い屋根をいだいた白い家越しにち
らちらと挨拶する。

早朝からの一仕事を終え、たっぷり暖かいポーランド風
の遅い朝食を済ませると、クリメックさんはこの海に挨拶す
るためにぶらぶらと散歩に出かける。それが夏の終りだった

りすると、尻尾をだらりと垂らして赤い舌を風に当てながら
気の向いた方に歩いてゆく大きな斑犬や、日焼けした背中に
白いシャツをひっかけた人間達や、松の木の間で熱気にちよ
っとぐったりした赤いカンナの行列なんかに出会うだろう。
この時間にはネットリして見える青い水に触れたら、日本に
帰ってもやっぱり指がウルトラ・マリンだった……。
骨張ったしなやかな上背をゆすってクリメックさんは歩い
て行く。いつものカフェに着くと、いつもの炭酸ソーダを楽
しみながら、遠くの方まで視線を伸ばす。それはまるで、も
う紅色が漂って来た水面を撫でる燈台の探照燈のようだ。ク
リメックさんの目はモジリアニの人物像のように淡いブルー
でとりとめがない。薬色の薄い髪の毛が風に靡いて、空気の
中にどこまでも広がってゆくようだ。午後には外出し、夕方ま
た薄暮の中を進んで行くと、さつきと同じ姿でカンヴァスを
手に海に向かって行くと、さつきと同じ姿でカンヴァスを
クさんは言う。三角波のように騒ぐ神経の昂りが、穏かな午
後の中に消えて行くと、来た時と同じコースを、十分間辿つ



ルィサイ ック・クリマック 「仔馬達の春」 1976年 92×73cm



はり大戦後のピカソやシャガールは、この土地のヴィジョンのなかで、しだいに恐るべき活力を増殖させていった。クリメックも、おそらく、この土地の明るいヴィジョンのなかで、さまざまな和らぎや快復力をみいだしたにちがいない。明るさ、それも広やかな、充分すぎるほどの光量をもった土地は、単にものごとを明確に見せてくれるだけではなく、逆に、しばしば、孤独や暗さを誘う。すでにセザンヌは、プロヴァンスの暗さについて語っていた。デュフィは、黒を、紺碧の海に配することによって、この土地の明るさに対応しようとした。めったに黒を使わないボナールも、しばしば、暗色、黒を画面の焦点にしている。黒や暗色を使わなかったが、シニャックたちは、明色が跳びはね、辰気楼のようにゆらめく世界を創った。スゴンザックは、神秘で、妖しげな雰囲気とその華麗な画面の背後にひそめている。

明るさは、傷心を癒し、開放と調和へと向わせ、やがて逆に、孤独と神秘へ、エロスと幻想へと誘いこんでゆく。こうした想いを、私自身、コート・ダジュールを見おろす小さな廃墟に近い城塞の擁壁で感じとったことがあった。

クリメックの世界もまさにそうである。あるフランスの批評家は、クリメックの世界のただならざる色彩と線の暴発を、「ラブレール風」と呼んでいる。「なぜラブレール風と呼ぶかといえは、それが、男性にとってもっともよく感知しうるような形態のもとに、自然に対する愛にあふれた表現だからである。それは、平和を運ぶ鳩のはばたきなり、馬のいななきな

り、強弱にかかわらず生のふくむものへの讃歌、豊饒へのたえざる讃歌であり、女性への愛は、どの作品にも欠けていることがない。生のシンボル、鳥、花、麦の穂、などがいたるところにある。」

しかし、ここにはラブレール風の哄笑はない。牧歌的、農耕詩的ではあるが、もつと強烈なエロスの支配する土地であり、そして笑ひよりは、孤独な、エロスの深みを凝視する屈折した視線がうかがわれる。

クリメックのニフたちの世界は、明らかに、マティスのバーンズ財団所蔵の《生の幸福》につながるものだろう。クリメックが直接この作品を目にしたかどうかは知らない。しかし、マティスの《生の幸福》の系譜は、やはりコート・ダジュールで描いたシニャックやクロスたちに伝わってゆく。野外の明るさと裸婦群像というテーマは、マティス以前にさかのぼれがアングルがあり、さらにルネッサンス期まで見ることができ。だから、必ずしも地中海的なテーマということではない。けれども、このテーマのもつ官能性、放恣で野放図できらめくばかりの輝きという性質は、地中海的な環境のなかで、どんな生育しうるにちがいない。たとえばピカソもこの環境のなかで、野外や海浜にねそべる女を巨人族の裸婦にまで成長させてしまっている。クリメックの女たちも、花も、鳥も、いや一本の糸もひとつの色彩のタッシェも、淫蕩に、放恣に成長している。地中海的環境は、クリメックの心のなかの影をすら、花や女たちの飼料としてしまったら

しい。
奔しり、とびはね、噴出する筆触は、一定の論理や法則がこの世に存在するということも知らぬげに画面を混沌にみたくしている。旋律的であるかと思えば、それはたちまち全く異質の旋律と衝突し、とびはじけてしまう。律動的であるかと

みれば、それはたちまち、律動を失なってしまう。エロスのな世界とは、もともと、大きな回帰的な旋律であるはずである。昼と夜が交替するように、生と死は、間断のない旋律のなかで替りつづける。エロスは、生が生であるために、そのがって死につながるものであるがためのエロスであり、その主旋律は、本来、論理的、法則的なものはずである。だが、クリメックのエロスは、そうした主旋律を無視してしまう。内発的で活力にみちた力が、旋律の交替をおそろしく不規則なものとし、衝撃的なものとしてしまう。生の無数の因子と、死の無数の因子とが、乱雑に、わいざつに、無規則に混じりあ

っているかのようだ。

こうした画を見ると、クリメックの明るい生が、いつでも死となりあつて生きられいることがわかる。クラコヴィアもスコスソウももうすっかり遠くになった。第二次大戦も、祖国の惨状ももう昔のことだし、それが祖国であつたかどうかもさだかでない。ジュアン・レ・パンの岬や松や海の明るい色調だけが包んでくれる。だが、遠くなったもの、もうほとんど忘れかけているものが、やはり、どこから、黒い微粒子のように心のなかにきらめいている。そうした画家の姿を、ふつと私が想い浮かべてみるのも、ただ彼の画面からの印象にすぎない。

ルドヴィック・クリメック「ひなげしのシャンソン」1972年 50×65cm



ルドヴィック・クリメック

中山公男

Monsieur Malagana

「この画家に賭けているのです。心中するつもりです」と、はなはだおだやかならぬことを「ぎやるリ猿」の若い店主がいう。それほど画家ではないと、多少はからかい気味に私がいうと、彼は一瞬ひるんだが、たちまち態勢をたて直して、何故この画家にこれだけかかっているかというのを、画商らしからぬ哲学的、文学的口調で、思いつめたように語りつづける。楽しい午後の座談であった。これほど熱中できる画家をもつことができた画商というのは幸せだろうし、逆にいえば、こうした画商をもつた画家の方ももって瞑すべきである。まさに夢を喰べる猿たちの幻想的な世界である。彼が何をしゃべったのかはとくに忘れてしまったが、熱中した口調と、何点かの作品の鮮烈で、しかもわいぎつな色彩の輝きが、今でも私の脳裏に残っているのがたしかめられる。

もともとニース派というか、コート・ダジュール派というか、この南仏リヴィエラ海岸の画家たちの世界には、驚くほど明るくて、乱雑で、そして神秘で独善的な哲学があるようである。彼らの仲間の批評家たちの文章さえそうである。彼らの文脈は、パリの批評家たちの文章といささか異なっている。

イタリア風の修辭、バロック的な文体にあふれているし、しばしば独善的なほど晦渋である。いわば中央、つまりパリのことだが、中央に対して自己を主張する気構えがあるのだろうか。もちろん彼らは、地方文化の独自性を主張してしかるべき根拠をもっている。ここは、ローマ時代、ユリア街道の通じていた古い土地なのである。いやもつと古く、マントン周辺は、旧石器時代の遺物の重要な出土地でもあるのだ。ユニークな地方文化のもつある種の心理的屈折がコート・ダジュールの文化人たちをひたしていることさえ可能だろう。

ルドヴィック・クリメックなる画家には、しかし、もつと複雑で激しい心理的屈折があるようである。彼は、履歴によればポーランドのシンジヤ、スコスソウに生れている。一九一二年のことである。そしてクラコヴィアのアート学校で学んだあと、一九三九年、二七歳のときにパリに出ている。一九三九年の初頭に出たらしいが、この年こそ、ドイツ軍のポーランドへの電撃的な作戦が行われた年である。大戦中、故国をいわば喪失した状態で、彼がどのようにに生き、どのようにに



ルドヴィック・クリメック「女に関するパロディ」1976年 54×74cm

作していたのか知らない。しかし、エクスやサヴォワで展覧会に出品しているから、おそらくかなりの困難のなかで制作しつづけたのだろう。マントン、サン・ポール・ド・ヴァンス、ジュアン・レ・パンなど、コート・ダジュールに定住して制作にいそしむのは、大戦後、一九四七年以来である。

東欧生れの、しかも故国喪失の状態、コート・ダジュールに住むというのは、どのような心理的屈折を内面化させるものか、私たちには見当もつかない。たとえば、第一次大戦をはさんで類似の状況にあったキスリングの場合などには、まだしも、その心理やヴィジョンの綾を讀みとめることは容易である。ポーランドの民族衣裳の鮮やかな色調やショパンの楽音が、エコール・ド・パリの内面化された孤独感や喪失感と響きあっている。だいいち、キスリングたちは、造型の上でも、精神の上でも、まだ、人間という存在を、まだ限りなく信頼し愛していたのである。第二次大戦中のポーランドの運命は、その前の大戦時の比ではない。造型の上では、パリの遊学の当初から戦後にかけて、表現主義的抑、抒情的抽象が、若いクリメックになんらかの形で支配力を及ぼしたにちがいない。彼の作品にはそれをくぐりぬけてきた痕跡がはつきりとうかがえる。しかし、彼は、いったい、そうした抽象で何を叫び、何を歌えはよかったのか。そして、実際にどう歌ったのだろうか。それは知らない。

コート・ダジュールの明るさ、開放感、柔軟と明確なヴィジョンは、どんな傷ついた心理をも癒してくれるらしい。や



ルドヴィック クリメック パヴァーヌ 油彩 73×54.5 1976

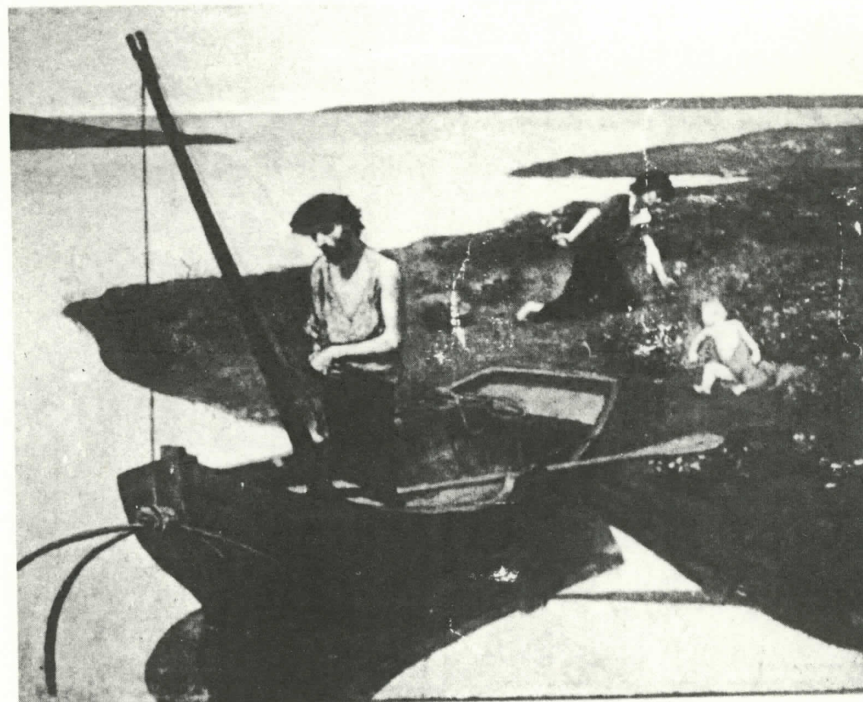


ルドヴィック クリメック ホヘミアンの馬車 油彩 73×54 1976



ルドヴィック クリメック 鷹狩り 油彩 99×80 197

地中海志向
ルドヴィック クリメック



シャヴァンヌ「貧しき漁夫」

属したエチエド・下絵、手紙などを、十点以上、覽したもので、画家の生涯が手に取るように見られるのもすばらしいことである。

ビュビス・ド・シャヴァンヌの作品を通じて感じることは、その象徴的な画法によって画面から余計なものを排除して行くはげしい表現法で、それを微妙な淡い色調で描いた独特の手法は、フランス第三共和国の當時の導徳的精神とまじわって、いままでになかった全く新しいものを感じさせる。

このシャヴァンヌの淡い色は、フレスコの調子を出すため（シャヴァンヌは一度もフレスコ画は行なわなかった）絵具の中からできる限り油分をむき出し、それをあらかじめ壁のように用意されたキャンパスの上に塗るという技法で行なわれた。

また、彼の画の中に、後のサビ派の、端やピカソ、マチスを思わせる現代的表現を見い出せたことは、この上もない喜びであった。

今回の展覧会は残念ながら二月十四日までだったが、ビュビス・ド・シャヴァンヌの主要な作品は、ルーブル美術館ならびにバンテオ・のサン・ジュヌビエアの生涯（火曜日をのぞく毎日10時から17時まで）ソルボンヌ大学の大講堂（金曜日の14時17時、土曜日の10時12時・14時17時）パリ市長舎のゾディアックの間（月曜日の9時30分12時）に見学できる。また、フランスの地方美術館を見られるチャンスのある方々は、アミアン・リヨン・マルセイユ・ルーアン美術館の壁画は見逃せないものだろう。

